生徒が変わり、授業が変わった

― 太山寺中学校のBefore／After ２年間の研究を振り返って ―

瀧口麻帆

太山寺中学校の英語科では、この２年間、育てたい生徒の姿を共有し、単元全体を見通した授業づくりに取り組んできました。基本文やQ&Aのトレーニングを土台に、生徒が自分の考えを持ち、友だちと英語で伝え合う授業を目指してきました。ここでは、英語科で進めてきた取り組みを、私の担当学級で見られた具体的な姿も交えながら振り返ります。

１．「先生、もう一度やらせて」

この２年間で、英語が苦手な生徒の授業に向かう姿が変わりました。以前は、教科書の内容に関心を持てず、授業にも後ろ向きだった生徒が、今では基本文やQ&Aのトレーニングに取り組んでいます。友だちに教えてもらいながら、「自分も頑張ろう」「やればできるかもしれない」と思い始めたのです。

プレゼンテーションがうまくいかなかったときには、「悔しい。先生、もう一度やらせて」と再挑戦を求める姿がありました。音読テストで最後まで読めなかった生徒からも、「もっと練習するべきだった。次は頑張る！」という言葉が聞かれました。できなかったことで諦めるのではなく、悔しさを次の練習につなげるようになったのです。

日本語でも文章を書くことが苦手だった生徒が、振り返りシートや英作文に多くの文を書く姿も見られます。こうした生徒の変化に目を向けることで、教師が具体的に認め、褒める機会も増えました。

２．一人で考える学びから、友だちの考えに学ぶ授業へ

英語科では、ペアやグループで考えを伝え合う機会を増やしてきました。その中で、友だちの意見を聞いて自分の考えを見直す生徒が増え、振り返りシートにも、誰のどのような考えから学んだのかを書くようになっています。

ディベートでは、自分の意見を主張するだけでなく、相手の立場から考える姿が見られました。「そんな考えもあるのだ」と気づき、自分の考えを練り直す生徒もいます。「次は、〇〇さんのように自分の考えを伝えたい」と、友だちのよさを目標にする生徒もいました。

私が担当した研究授業では、「幸せ」をテーマに意見を交わしました。友だちの考えを聞くことで、「自分が幸せだと感じることは、ほかの人にはどう見えるのだろう」「〇〇さんがそう考えるのは、どのような経験があったからなのか」と考えを深めていきました。

一つの正解を求めるのではなく、異なる経験や考えに触れながら、自分にとっての幸せを捉え直す時間になりました。英語を通して、自分のこれからの人生にも関わることを考える。英語科が目指してきた授業を、生徒の姿として確かめることができました。

３．「嫌いだから仕方がない」から「次はこうしたい」へ

以前は、勉強を「させられている」と感じたり、できないことを「嫌いだから仕方がない」と受け止めたりする生徒がいました。しかし、活動を通して「できなかった」「うまく言えなかった」と感じたことが、次の目標につながるようになりました。

「次はもっと○○できるようになりたい」「そのために、○○しよう」。こうした振り返りからは、自分の学習方法を見直し、もう一度挑戦しようとする気持ちが伝わってきます。教師に言われたことを終えるだけでなく、自分で次の課題を見つける姿が増えました。

４．基本文とQ&Aが、話す・書くための土台になった

英語科で共通して取り組んできたのが、基本文とQ&Aのトレーニングです。基本となる英文を繰り返し練習し、質問したり答えたりする中で、実際のやり取りに使えるようにしていきます。生徒の振り返りにも、このトレーニングについての記述が多く見られました。

授業を見直す中で大切にしたのは、文法の説明やワークシートでの練習にとどまらず、学んだ表現を使って自分の考えを伝える機会をつくることです。自分に関わる話題について、伝えたいことを表すために英文を使う経験が、文法の理解にもつながることが分かりました。

基本文の一部を言い換え、話したり書いたりする生徒も増えました。私の担当学級では、英作文で34人中16人が、何も見ずに50語以上を書くことができました。これは、私にとって、これまでにない成果でした。

５．「登場人物になりきる」ことで変わった音読

生徒が自分で目標を立てて練習できるよう、評価基準を事前に示すことも大切にしてきました。ここでは、私の授業で行った音読の取り組みを紹介します。

授業前からデジタル教科書の音声を使ってシャドーイングに取り組み、「１ページを40秒で読む」という目標を示しました。さらに、「登場人物になりきって読む」という条件を加えると、生徒は発音や抑揚にも気を配るようになりました。ある生徒は、登場人物になりきり、話している情景を浮かべることを大切にしたと振り返っていました。

「陸の意見を理解し、自分ならどうするかを、自分が知っている単語でペアに伝えることができた」「音読をしているうちに、単語の意味や話していることが分かってきた」。このような振り返りからも、場面や登場人物の気持ちを考えながら読むことが、内容理解につながっていると分かります。

以前は、単語の確認や音読の後、教師が内容を詳しく説明していました。今は、授業前や家庭で「なりきり音読」を重ねています。その結果、説明の時間を減らし、生徒が英語で伝え合う時間を確保できるようになりました。

６．「明日は何をしよう」から、単元全体を見通す準備へ

英語科で授業を見直す大きな転機となったのが、中嶋洋一先生の指導と、福岡市の上野先生、松田先生の授業参観でした。生徒が自分から英語を使う姿に衝撃を受け、私たちは、単元全体を見通して授業を組み立てることに取り組みました。

以前の私の授業も、教科書のそのページや、その時間に扱う文法が中心でした。活動同士のつながりが弱く、授業が終われば、生徒の中に内容が残らないこともありました。そこで挑戦したのが、「令和型指導案」の作成です。栗橋ゆかり先生の指導案をもとに学び、私の場合は、２つの単元の指導案をつくるのに１か月かかりました。

この指導案は、舞台の「台本」のようなものです。教師の動きだけでなく、生徒の反応や思考、単元を通して育てたい姿まで具体的に描きます。英語科で目指す生徒の姿を共有しながら、毎時間の学びが単元の目標にどうつながるのかを考えてきました。

作成には時間がかかりましたが、完成すると、日々の授業準備にかける時間は大きく減りました。単元全体の流れが見えているため、その都度、大量の教材をつくる必要がなくなったのです。基本文、Q&Aシート、活動用ワークシート、振り返りシート、評価基準、テストなどを単元開始前に準備することで、日々の準備に追われる働き方も変わってきました。

７．生徒を大切にする思いと、生徒を見取る目

授業を見直すことは、生徒を見る目を問い直すことでもありました。生徒を大切にする思いがあっても、生徒が何を考え、何に困り、どのような力を身につけているのかを捉えられているとは限りません。私自身、「愛」はあっても、生徒の学びを見る「eye」が足りなかったと感じています。

以前は、生徒が友だちの考えに触れ、自分の考えを見直す場面を十分につくれていませんでした。考えを整理するためのマンダラ・チャートやマッピングも、十分に活用していませんでした。英語科で取り組みを進める中で、活動を用意するだけでなく、その中で生徒がどう考え、どう変わるのかに目を向けるようになりました。

私の授業でも、１学期には、単元全体を見通して組み立てても、期待したほどの変化は見られませんでした。変化が見え始めたのは、２学期に、毎時間の生徒の反応まで具体的に考えて指導案をつくるようになってからです。「この場面で、生徒は何を考えるだろう」「どのような言葉が出てくるだろう」と想像しておくことで、実際の授業でも生徒の変化に気づけるようになりました。

生徒の反応や言葉が面白い。笑顔で話す場面や、自分から取り組む姿が増えるにつれて、教師自身も授業を楽しめるようになりました。英語科で目指す姿を共有し、授業を変え、生徒の姿を確かめる。その積み重ねが、生徒の学びとともに、私たち教師の授業の捉え方も変えてきました。